

英文論文の和文要旨

田中宏之：佐渡島（新潟県）に分布する前期中新世の真更川層から見出された *Aulacoseira praegranulata* var. *praeislandica* (Jousé) Moisseeva

佐渡島に分布する真更川層（下部中新統）の珪藻質泥岩から、*A. praegranulata* var. *praeislandica* が多産する（出現頻度 42–69%）化石珪藻群集を見出した。出現珪藻は *Aulacoseira praegranulata* の変種が 2 分類群（*A. praegranulata* var. *praeangustissima*, *A. praegranulata* var. *praeislandica*）でほぼ 100% の出現率である。*A. praegranulata* var. *praeislandica* は Moisseeva (1971) が図示しているように、胞紋が密に配列する殻と粗に配列する殻が見出されたほか、殻の非常に厚いものが産出した。*A. praegranulata* var. *praeangustissima* と *A. praegranulata* var. *praeislandica* の識別は、殻直径の長さの違いのより行い、var. *praeislandica* の 3 形態の識別は、胞紋の密な殻 (densely formed)、胞紋が粗の殻 (Coarsely formed)、殻壁の厚い殻 (thickly formed) であるが、これらは連鎖している殻も見出された。

(〒 371-0823 群馬県前橋市川曲町 57-3 前橋珪藻研究所)

林 辰弥¹・大野正夫¹：北大西洋垂域極の鮮新統上部—更新統下部の珪藻：3. *Thalassionema bacillare*

現在では温暖種として知られる *Thalassionema bacillare* は、鮮新世—更新世境界の頃には北大西洋垂域極においても主要な珪藻の 1 種であったことが近年明らかにされた。本稿では、北大西洋垂域極の鮮新統上部—更新統下部の堆積物から回収した化石の詳細な観察を通して *T. bacillare* の形態を調査した。本研究で調査した化石被殻の形態形質の多くは *T. bacillare* の現生標本に関する先行研究の結果と一致するものの、幾つかの重要な発見があった。例えば、化石被殻の両頂端にはしばしば孔があり、先細形状の頂端部には棘がないが、このことはおそらく調査した化石被殻のケイ化の程度が弱いことに関係する。また、被殻の最小長は以前に報告されていたよりもはるかに短く、唇状突起の外部開口は両極で形状がわずかに異なる。*Thalassionema bacillare* の現在の分布域は限られているため、その化石は古海洋環境を復元するための良い指標となる可能性がある。

(¹ 〒 819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 九州大学・比較社会文化研究院・地球変動講座)

吉田恵史郎^{1,2}・大塚泰介³：屋内メダカ飼育容器内の珪藻フロア調査

屋内メダカ飼育容器内の珪藻フロアを調査した。調査を行った全屋内メダカ飼育容器から、25 属 63 種の珪藻が確認された。飼育容器 1 本あたりに出現した珪藻は、0–11 属 0–17 種であった。確認された珪藻は、中性や好アルカリ性の種が多かったが、一部の容器からは好酸性の種も確認された。最も多く確認された種は *Cocconeis lineata* で、採取した飼育容器の 42% に出現した。最も種数が多かった属は、*Gomphonema* で 11 種だった。本研究で、屋内メダカ飼育容器に出現する珪藻の基本的な情報を得ることができた。

(¹ 〒 578-0903 大阪府東大阪市今米 1-14-5 ジェックス株式会社, ² 〒 525-0001 滋賀県草津市下物町 1091 琵琶湖博

物館はしかけ・たんさいぼうの会, ³ 〒 525-0001 滋賀県草津市下物町 1091 滋賀県立琵琶湖博物館)

Christopher S. Lobban：中央太平洋のマジュロ環礁から新種記載された *Licmophora complanata* (珪藻綱：オビケイソウ科)

マーシャル諸島マジュロ環礁の試料から、隔壁 (septum) 末端に大きな孔 (apical window) と付随する孔構造 (additional perforations) をもつ新種 *Licmophora complanata* を記載した。本種は殻の幅が狭いため、光学顕微鏡観察では、多くの場合殻が帯面を上向けた三角形にみえる。走査電子顕微鏡下で本種の標本を最大 80 度まで傾けて、殻面観と唇状突起を観察できた。殻長は 92–140 μm、殻幅は 8 μm で殻幅の広がる部分が 3ヶ所あり、中央で最も幅が広がる。本種の胞紋は長軸方向に長く、篩板の形態は *Licmophora abbreviata* に類似するが、本種は *L. abbreviata* と比べて条線と胞紋の間隔が広い点で区別される。本種の形態は、隔壁末端に大きな孔を有し、殻端が長いくちばし状になる点で、*Licmophora peragallioides* や *Licmophora clevei* と最も類似していた。

(Division of Natural Sciences, University of Guam, Mangilao, GI 96923, USA)

三村武士¹・大塚泰介¹：西日本暖温帯の谷湿原である藤ヶ鳴湿原の珪藻

岡山県岡山市の中間湿原、藤ヶ鳴湿原の珪藻植生を調査した。藤ヶ鳴湿原は海拔 220–240 m の丘陵地にあるミズゴケ湿原で、緩やかに傾斜した尾根に囲まれた谷底に位置する。野外調査及び標本採集を 2016 年 3 月 14 日に行った。水質は弱酸性 (pH 5.8–6.5) で、電気伝導度は低かった (2.4–3.2 mS m⁻¹)。5 カ所で採集した計 15 標本から 32 属 111 種の珪藻を認めしたが、うち 16 種は未同定である。その全種を光学顕微鏡写真付きのチェックリストとして示した。出現種数が最も多かった属は *Pinnularia* で 25 種、次いで *Eunotia* が 17 種であった。

(¹ 〒 525-0001 滋賀県草津市下物町 1091 番地 滋賀県立琵琶湖博物館, ² 〒 525-0001 滋賀県草津市下物町 1091 番地 琵琶湖博物館はしかけ・たんさいぼうの会)

納谷友規¹・畑中雄太²：沖縄本島に漂着した福岡ノ場火山 2021 年噴火で発生した軽石に着生する珪藻に関する速報

2021 年 8 月に発生した小笠原諸島の福岡ノ場海底火山噴火によって大量の軽石が海中に放出された。軽石は軽石筏 (pumice rafts) を形成して太平洋を西方に移動して、2021 年 10 月に 1000 km 以上離れた沖縄本島の海岸に漂着した。本研究では、沖縄本島に漂着した軽石表面に珪藻が付着していることを、軽石付着物の光学顕微鏡観察と軽石表面の走査型電子顕微鏡観察によって明らかにした。軽石からは 16 分類群の珪藻が観察された。このうち、*Mastogloia* 属が 10 分類群と分類群数が最も多く、観察されたすべての軽石において、本属が珪藻群集の 80% 以上を占めていた。次いで多かったのが *Rhopalodia pacifica* で、5–10% を占めた。この結

果は、漂流軽石が海洋における一部の付着珪藻の分散に寄与している可能性を示唆する。

(¹ 〒 305-8567 茨城県つくば市東 1-1-1 産業技術総合研究

所地質調査総合センター、² 〒 900-0025 沖縄県那覇市壺川 3-5-1 日本工営（株）沖縄支店）